

プラトンの「三つの比喩」  
序・太陽の比喩

はじめに

さて、今回は、プラトンの「三つの比喩」（序・太陽の比喩）という作品であるが、プラトンの学ぶべき最大の学業としての「善のアイデア」については、それがそのまま語られているのではなく、いわゆる「三つの比喩」（それは「太陽の比喩」と「線分の比喩」それに「洞窟の比喩」という形で語られているものである。

そこで、今回は、まず、「太陽の比喩」から丁寧にかけてみたいと思うが、その前に、「序」としては、約一三八億年前の「宇宙の誕生」から今日までの大まかな「推移」とともに、特に「言葉」（それは「話し言葉」と「書き言葉」とがわれわれ人類にどれほど大きな影響を与えてきたかの考察であり、その後、いよいよ「太陽の比喩」についての本文に寄り添った丁寧な考察になっておりますが、このプラトンの「三つの比喩」（それは「太陽の比喩」と「線分の比喩」それに「洞窟の比喩」というものを可能な限り厳密に説明するためには、実に様々な自ら作成した「図やイラスト」などの掲載がどうしても必要不可欠になるが、それを「電子書籍」と一緒に掲載することはできないので、結局、文章（言葉）だけの説明になってしまいますが、二千数百年以来の「謎解き」に敢えて挑戦するという「試み」であり、興味や関心がありましたら、ぜひとも訪ねて見てください。

令和二年二月吉日（決定版）

如月翔悟

## 目次

プラトンの「三つの比喩」

### 序・太陽の比喩

はじめに

#### 一、序（言葉について）

#### 二、言葉

一、「話し言葉」中心の社会

二、「記憶力の訓練」の必要性

三、豊富な「記憶保存」と「情報伝達手段」

四、ソクラテスやプラトンの時代

五、「書き言葉」（「文章を書く」とは

六、文章を書きながら、ものを考える

七、世界の「四大聖人」

八、「書物」（書籍類）の役割

九、「話し言葉」と「書き言葉」の併用

十 プラトンの「書物」に対する「考え方」

#### 三 太陽の比喩

一、「可視界」と「可知界」

二、「言葉」の確認

三、「目」の独自の特徴

四、「太陽」と「善のイデア」の対比

五、「光」の再確認

六、「叡知界」（「イデア界」とは

七、〈善〉と〈太陽〉との関係性

八、「純粹思惟」から「精神の飛翔」へと

九、プラトンの「太陽の比喩」の「結論」

※ 参考文献

序

## 序（言葉について）

さて、宇宙の初めは、時間も空間も物質もない「無」（「真空」）の状態であったという。そして、そのエネルギーの高い「真空」状態では、絶えず小さな「ゆらぎ」が生じては消えている状態であったが、やがて、その「真空のゆらぎ」から「宇宙」のたねのようなものが生じては光よりも速い速度で「膨張」（インフレーション）を起し、その宇宙のすべての物質を含む一センチぐらいの超高温・超高密度の「火の玉」状態になったときに、まさに「ビッグバン（大爆発）」が生じたと同時に、凄まじい勢いで「膨張・拡大」を始めることになるわけだが、それが今から約一三八億年前のことになるわけである。

そして、その「ビッグバン（大爆発）」直後は、まさに「超高温世界」で、いわゆる「光子」をはじめ、「電子」や「クォーク」などが飛び交うような状態であった。また、一〇万分の一秒後、温度は、一兆度に下がり、いわゆる「クォーク」が結合をして、まさに「陽子」や「中性子」などが生じるようになったという。そして、一〇〇分の一秒後、一〇〇億度の時には、大量の「光子」を初め、「ニュートリノ」、「電子」などが飛び交い、それに少量の「陽子」や「中性子」が存在していたという。さらに、三分後、温度は、一〇億度まで下がり、いわゆる「陽子」と「中性子」とが結びついて、初めて「原子核」が誕生することになるわけである。それから約三十八万年後に、その「原子核」と自由に飛び交っていた「電子」とが結びつき、最初の「原子」である、いわゆる「水素」や「ヘリウム」などが誕生することにもなるわけだ。そして、自由に飛び交っていた「電子」が「原子核」と結びつくことによって、「光子」がまっすぐに進むことができる、いわゆる「宇宙の晴れ上がり」状態になったということである。

その後、最初の巨大な「星（恒星）」が誕生し、その内部の「核融合反応」によって、まさに「水素が燃焼してヘリウムを生み出す」という、それは、「水素↓ヘリウム↓炭素↓ネオン↓酸素↓ケイ素↓（鉄）」とそれぞれ同じように「核融合」を起し、その巨大な「星（恒星）」は、膨張と収縮を繰り返しながら、最後は鉄で核融合は止まり、まさに「超新星爆発」を起すとともに、様々な「物質」（例えば、ケイ素、イオウ、塩素、アルゴン、ナトリウム、カリウム、カルシウム、チタン、クロム、マンガン、鉄、その他）なども新たに「宇宙空間」にばらまかれ、その「宇宙空間」にばらまかれた「物質」がまた集まって新たな「星（恒星）」を生み出すという、そういう「誕生と消滅」とを無限に繰り返しながら、数多くの「星（恒星）」その他の物質などを含んだ「原始銀河」が形成されるとともに、その「原始銀河」から実に数多くの「銀河」へと「進化」（変化）することになるが、その一つが、われわれの「銀河系」ということであり、それは、今から約一三二億年前に誕生している。そして、そのわれわれの「銀河系」（つまり「天の川銀河」）のなかに、約四十六億年前に、われわれの「太陽系」が新たに誕生することにもなるわけだ。そして、その広大な「宇宙空間」には、何と約七兆以上の「銀河」が存在するとともに、その一つの「銀河」のなかに、約数千億の「星（恒星）」その他が存在すると、一般的には言われているものである。

さて、そのように「膨張・拡大」し続ける「宇宙空間」に、やがて「原始銀河」が誕生し、その「原始銀河」から実に数多くの「銀河」へと進化することになるわけだが、その一つが、われわれの「銀河系」（つまり「天の川銀河」）であり、その「天の川銀河」の

なかにやがてわれわれの「太陽系」が誕生し、そして、その「太陽系」の第三惑星こそは、まさにわれわれの「地球」ということになるわけである。その「地球」は、今から約四十六億年前に誕生し、やがて、その「原始の海」から最初の「原始生命」（つまり「原核細胞」）が誕生することになるが、それが今から約四〇億年ぐらい前ではないかと推測されているものである。そして、「……先カンブリア代、古生代、中生代、そして、新生代」という永い「地質時代」を経る間には、実に多種多様な「動植物」たちが現われたり、消えたりしながらも、今日まで永々と「進化」を続けているわけである。それでは、われわれ人類の誕生は、一体、いつ頃になるのだろうか？ それは、約七〇〇万年ぐらい前であり、それは、次のようなことから始まったと言われているものである。

遙か遠い大昔、われわれ人類の祖先とされる猿たちは、豊かな森林の木の上で生活をしていたという。やがてアフリカ大陸の真下では大きな「地殻変動」が起こり、その南北に走る「大地溝帯」の形成のために、その「大地溝帯」が豊かな「森林の大地」を東西に分ける結果となったとともに、その東側では雨があまり降らないような環境となり、そのために、豊かな「森林」から「草原」へと変化することとなり、その結果、われわれ人類の祖先とされる猿たちは、やがて「森林」の樹の上から下りて、いわゆる「草原」で生活をするようになるとともに、その頃から、次第に「直立二足歩行」を始めるようになったというのが、「従来の定説」（つまり「イーストサイドストーリー」）であったわけである。

ところが、二〇〇一年に、最古のヒトの化石と呼ばれる「トウーマイ」がアフリカ中部のチャド共和国ジュラブ砂漠で見えされると、その「考え方」は、大きな打撃を受け、今日では、アフリカ中部のまだ森林豊かな時から、われわれ人類の祖先たちは、なぜか地上を「直立二足歩行」するようになったという「考え方」に大きく変わって来ているのである。そして、その「直立二足歩行」こそは、他の動物たちとは決定的な「進化の違い」をもたらした、われわれ人類への大きな「一歩」になったわけである。——例えば、中生代の爬虫類から進化したと考えられる「鳥類」は、その身に「両翼」を得ることによって、今までの水中や陸上だけではなく、さらに、果てしなく広がる大空を自由に飛びかける無限の行動範囲を獲得することになるわけだ。それは、確かに「画期的な進化」であったことに間違いはない。しかし、その「画期的な進化」が、鳥類をして、彼らの「知的運命」を決定づけてしまった。それは、なぜかと言えば、それは、「鳥類」が「鳥類」である限りは、半永久的に「大脳」を大きくすることができないという、決定的な「宿命」を背負い込むことになってしまったのである。——つまり、鳥が大空を自由に飛びかけるためには、いわゆる「頭部」（つまり大脳）を大きくすることは、まさに「致命的な欠陥」となり、それは、「飛行を不可能にする」ものだからである。それゆえ、鳥が大空高く自由に飛びかける鳥である限りは、「頭部」（つまり大脳）をある一定以上に大きくすることは、でき得ないことになる。そのために、「鳥類」の「知的発達」を高度に期待することは、半永久的にでき得ないという「残酷な宿命」が決定づけられているのである。

一方、われわれ人類の祖先たちは、いわゆる「直立二足歩行」を始めることによって、逆に、大脳を大きくすることを可能にしてきたわけである。そして、「直立二足歩行」によって自由になった「両手」を使って、様々な「道具」をつくり、それを利用することによって、さらに大脳の発達を促すこととなり、やがて、お互いの「意志疎通」を図るために、いわゆる「話し言葉」も生まれてくるわけである。そして、その「話し言葉」の誕生

こそは、まさにわれわれ人類にとって極めて画期的な一大事件であったことに間違いはない。それは、ただ単にお互いの「思いや考え」などを相手に伝えることが可能になっただけではなく、物事を深く考えるという「思考（思索）能力」を一気に飛躍させたことは、容易に想像できるからである。——というのも、われわれ人間というのは、「言葉」を使うことよってこそ、初めて、物事を深く考えることが可能になるからである。それは、例えば、もしわれわれ人間の赤ん坊（乳児）が、生まれた時からすぐに人間社会から完全に隔離されて、人間の「言葉」をまったく聞き学ぶことがなければ、その人間の子供は、大人になっても、恐らく、人間らしい「思考」は、ほとんどでき得ないだろう。そのようにわれわれ人間というのは、まさに「言葉」を媒介として物事をあれこれ考えているのであり、それゆえ、若しも「言葉」がなければ、われわれ人間は、人間らしい本格的な「思考（思索）活動」などは、まったくでき得ないものである。

それはともかく、われわれ人類の永い歴史のなかで、最初は、「書き言葉（文字）」がなく、「話し言葉」しかなかった時代が、かなり永い間続いたが、その頃のわれわれ人間の「思考（思索）能力」は、一体、どの程度のものであったのか？ それはもちろん、「書き言葉（文字）」が存在しないのだから、これという確かな記録は、何も残っていない理由であり、それゆえ、何とも言えないものだが、それでも、「話し言葉」を思うように自由に使いこなせるようになった頃には、すでにかなり深い「思考（思索）活動」も行なわれていたに違いない。ただその人の考えたことを書き記す手段がなかったために、やがて忘れてしまったり、あるいはその人の死とともに消えてしまった場合も多いのだろう。また、たとえ「口伝え」（つまり「口承」という形）で他の人に広まったとしても、人から人へ伝えられていくうちには、その「内容」もかなり違ったものになってしまう場合も多かったかと思う。やがて、「書き言葉（文字）」が発明され、そして、われわれ人類が、「書き言葉（文字）」を自由に使いこなせるようになった頃から、われわれ人間の「思考（思索）能力」は、一段と深まって、今日とほとんど変わらないう状態になったことも、ほぼ間違いないことだろう。——例えば、ヨーロッパにおいては、ホメロスの叙事詩から始まり、やがて、イオニア地域に自然哲学（万物の根源は何かという問い）が発生し、様々な自然哲学者、また、多くのソフィストたちや三大悲劇作家、そして、有名なソクラテス、プラトン、そして、アリストテレスなどが続々と登場してくるわけである。一方、インドでは、ウパニシャッド哲学（奥義書）やシャカ（釈尊）などの出現、そして、中国では、いわゆる「諸子百家」などが大活躍する時代になっていくことである。

ところで、この時期（およそ前七〇〇年から前三〇〇年前の間）に、われわれ人類の「精神（或いは大脳）」のなかで何か真に驚くべき画期的な一大事件が起こったことは、ほぼ間違いないことだろう。そうでなければ、この時期に、これほどまでに集中して多くの思想家たちが誕生するはずもないからである。それでは、われわれ人類の「精神（或いは大脳）」のなかで、一体、何が起こったというのだろうか？ それは、昔から「一つの大きな謎」として、いろいろな人たちによって考えられてきたものだが、しかし、この「謎」は、それほど難しいものではない。それは、われわれ人類が「話し言葉」というものをほぼ思い通りに自由に使いこなせるようになった頃から、われわれ人類の「思考（思索）能力」は、一段と深まり、そして、日常生活的な思考や実用的な思考だけではなく、人間や様々な物事の「本質、真実、真理、源泉、その他」などを本格的に探究するようになるわ

けである。そのようなことによって、われわれ人類の「思考（思索）能力」は、さらに鍛えられ、深化し、そして、ある日、ある時、われわれ人類の「精神（或いは大脳）」のなかで、それは、まさに「天地開闢（かいびやく）」のごとき画期的な「一大内の事件」が起きたということである。それは、一体、何かと敢えて問えば、それこそは、まさに「内的成長」の一つの到達点である、いわゆる「覚醒・開悟」というものである。もちろん、その「覚醒・開悟」は、すべての人間の「精神（或いは大脳）」に起きたわけではない。決してそうではない。人間や様々な物事の「本質、真実、真理、源泉、その他」などをどこまでも厳密かつ徹底して探究し続け得た、極めて僅かな人間の「精神（或いは大脳）」のなかで起きた一大「内的事件」だったわけである。そして、そのような人たちがやそれに近づいた数多くの人たちが、その「思惟界」で観て取った人間や様々な物事の「本質、真実、真理、源泉、その他」などを、古くは「石や粘土板、また、竹やパピルス、その他」などに書き記したわけだが、やがて、多くは「紙」に書き記されるようになるわけである。そのために、膨大の量の「書物」（書籍類）が、古今東西を問わず、世界中で書き記され、そのなかで、特に優れたものが、まさに「古典」として今日まで残されているということである。

そのように、われわれ人類の「知的財産」の保存は、ほとんど「書物」（書籍類）に書き残されてきたわけである。そして、何らかの専門的な知識を学ぼうとする人たちは、例外なく、「書物」（書籍類）を読むことを怠ることはできなかつただろう。それゆえ、「書物」（書籍類）こそは、われわれ人類の「知的部分」を高度に鍛え、育ててきた唯一絶対のものだということではない。もちろん、そうではない。ただ、その貢献度には想像を絶するほどの絶大なものがあつたことに間違いはないだろう。それは、今日でもそれほど変わりはないように思われる。つまり、われわれ人類の「思考（思索）能力」というのは、まさに「話し言葉」と「書き言葉（文字）」とを自由自在に使いこなすようになってから、極めて急速に「進化・進歩」し、そして、わずか数千年の間に今日のようなかなり高度な「文化・文明」を築き上げてしまったということである。

それは、われわれ人類の祖先とされるアウストラロピテクス（猿人類）が、アフリカの大地をいわゆる「直立二足歩行」で歩きはじめるのが、第三紀の終わり頃（およそ四〇〇万年前）になるわけである。それから、「……原人類、そして、旧人類や新人類」と進化が進むことになるが、この時期は、まだ「旧石器、中石器、そして新石器時代」であるとともに、当然のことながら、まだ「書き言葉（文字）」などは、あるはずもなく、それどころか、そもそも「話し言葉」さえいつ頃から誕生したのか？ それすらもよく分からない状況であるが、それでも猿人類には、すでに言葉の発生はあつたらしく、そして、旧人類や新人類ともなれば、間違いなく、「話し言葉」を日常的に使うようになるわけである。そして、その「文字」発生以前の時代を、一般に「先史時代」と呼び、一方、文字による記録が残される「歴史時代」というのは、エジプト、メソポタミア、インド、そして、中国に発生した「四大文明」とともに始まることになるかと思う。それは、およそ五く三千年ぐらい前のことである。つまり、「書き言葉（文字）」の使用が認められない「先史時代」までの極めて長い時間に比べて、文字による記録が始まる「歴史時代」の約数千年という時間の短さは、一体、何を物語っているのだろうか？ それは、「話し言葉」だけでも確かにわれわれ人間の「思考（思索）能力」をかなり深めることは、可能であるとしても、「話し言葉」と「書き言葉（文字）」との併用こそが、われわれ人類の「思考（思索）



能力」を極めて飛躍的に高め、かつ深める結果となった最大の要因であることは、まったく疑う余地はないように思われる。

そのように、われわれ人類の「知的財産」の保存は、ほとんど「書物」(書籍類)に書き残されてきたという永い歴史があるわけだが、それは、ごく最近まで、まさに「活字文化」がその主たる役割を果たしてきたということでもあるわけだ。ところが、今日では、いわゆる「ニューメディア」(例えば「インターネット」などの発達とともに、われわれ人類の長い歴史が大きく変わろうとしているのかも知れない。それでは、どのように変わろうとしているのか、それらのことをも含めて、プラトンの「三つの比喻」について、できるだけ詳しく考えてみたいと思うわけである。

\*

\*

## 言葉

## 「言葉」について

最初の「序」のところでも少しふれたが、われわれ人類の歴史のなかで、「書き言葉（文字）」がなく、いわゆる「話し言葉」だけで生活していた時期が非常に長くつづいたわけである。それが、一般に「先史時代」と呼ばれているものである。そして、「話し言葉」だけで生活していたわれわれ人類の祖先たちの「思考能力」というのは、いったいどの程度のものであったかはよくわからないが、しかし、その「話し言葉」を自由に使いこなせるようになった頃には、すでにかなり深い「思考（思索）活動」が行なわれていたとみても、それほど大きな誤りにはならないだろう。恐らく、当時の人たちのなかでも特に傑出した人物たちの考え出した「考えや思想」の「深さ」というものは、その後の、つまり、「文字」使用後の優れた思想家たちとそれほど変わるところはなかったかも知れない。ただ、いわゆる「書き言葉（文字）」がなかったために、それを「文章」として何かに書き記されることがなく、それゆえ、それがどのような「考えや思想」であったのか、今日のわれわれにはそれを正確に知る方法や手段がまったくないというだけである。

それでは、「話し言葉」だけでもかなり深い本格的な「思考（思索）活動」ができれば、いわゆる「書き言葉」などはあってもなくてもどちらでもよい程度のものなのか。この「問題」については、プラトンの『パイドロス』という著作のなかにも出てくるので、それと一緒に考えてみたいと思う。それは、こういう話からはじまるものである。

まず、登場人物のソクラテスが、一つの「物語」（いわば作り話）を話し相手のパイドロスにするところから始まるわけだ。それは、「……むかし、エジプトに住んでいた、テウトという神は、はじめて算術と計算、幾何学や天文学、さらに将棋と双六などを発明した神であるが、とくに注目すべきは文字の発明であった」。そして、彼は、やがて当時エジプトの王様であったタモスのところに向いては、「……王様、この文字というものを学べば、エジプト人たちの知恵はたかまり、もの覚えはよくなるでしょう。私の発見したのは、記憶と知恵の秘訣なのですから」というと、それに答えて、タモスは、次のように語るわけである。つまり、「……人々がこの文字というものを学ぶと、記憶力の訓練がなおざりにされるため、その人たちの魂の中には、忘れっぽい性質が植えつけられることになるだろう。それはほかでもない、彼らは、書いたものを信頼して、ものを思い出すのに、自分以外のものに彫りつけられたしるしによって外から思い出すようになり、自分で自分の力によって内から思い出すことをしないようになるからである。じじつ、あなたが発明したのは、記憶の秘訣ではなくて、想起の秘訣なのだ。また他方、あなたがこれを学ぶ人たちに与える知恵というのは、知恵の外見であって、真実の知恵ではない。すなわち、彼らはあなたのおかげで、親しく教えを受けなくてももの知りになるため、多くの場合ほんとうは何も知らないでいながら、見かけだけはひじょうな博識家であると思われるようになるだろうし、また知者となる代りに知者であるといううぬぼれだけが発達するため、つき合いくい人間となるだろう。……」（275A～B）

### 一、「話し言葉」中心の社会

これは、非常に興味深い。というのも、今日、われわれのように「話し言葉」と「書き

言葉」とをあたり前のように併用して生きている人たちにとっては、ほとんど想像しにくいことであるが、その昔、いわゆる「話し言葉」しかなかった時代の人たちにとって、様々な出来事や自分たちが体験・経験したこと、また、人から聞いた「大事な話」や人に伝えるための「伝達の言葉」、その他、なんであれ、その人にとって大事だと思われることをできるだけ忘れないようにするための、また、それを容易に思い出せるようにするための、いわゆる「記憶力の訓練」というものが非常に大事なことであったに違いない。そして、ほとんど信じられないような膨大な量の記憶を極めて正確に覚えていて、また、それを必要に応じていつでも「思い出す」ことのできる、そういう「記憶力の達人」とも言うべき人物もかなりいたのだろう。そして、もちろん、そういう人たちだけではなく、一般人たちも、大事だと思われるような様々な出来事や人の話は、かなり真剣に見聞きしていたに違いない。とにかく今日のわれわれのように、あとでテレビや新聞、また、雑誌やDVD、その他でじっくりと見聞きすれば、それでよいというわけにはいかないで、ほとんどすべてが一回限りのこととして、かなり、真剣に見聞きするのが、ふうであつただろう。ましてやそれがその人にとって極めて大事なことであったりすれば、なおさらのことである。むろん、人によってそれぞれ違ってくるだろうが、しかし、一般の人たちにもそういう傾向はあつたかも知れない。ましてや何らかの知識人や思想家であれば、各人それぞれ「記憶方法」は、それぞれたとえ違っていても、とにかくその人にとって大事なことや、また、自分の考えや思想をできるだけ忘れないように、また、比較的容易に思い出せるようにするための、いわゆる「記憶力の訓練」というものを行ない、それをしっかりと身につけていたに違いない。そうでなければ、次から次へと大事なことで何でも忘れてしまうことになるからである。それゆえ、それを何とかしてくい止めなければならぬ。そのためにも、何らかの「記憶力の訓練」ということは、各人が行なっていたに違いない。だとすれば、ソクラテスやプラトンなどはむろん、すでに「書き言葉（文字）」のある時代に生きていた人たちであつたが、それでも今日から比べれば、遙かに「話し言葉」中心の世界に生きていた人たちである。そうだとすれば、今日のわれわれと比べれば、遙かに「記憶力の訓練」を行ない、そして、それをしっかりと身につけていた人たちだったかも知れないのである。

## 二、「記憶力の訓練」の必要性

例えば、ソクラテス自身は、自分で書物を書くということとはしなかったが、他人の書いた「文章や書物」などを読んで理解するというようなことは、当然できたわけである。それでも、ソクラテス自身の全生涯を通じて、その中心となつた言葉が、いわゆる「話し言葉」であつたことは、もうまったく疑う余地はない。だとすれば、ソクラテス自身も、大事なことをできるだけ忘れないようにするために、何らかの「記憶力の訓練」を行ない、それをしっかりと身につけていたかなり「記憶力の優れた人」だったに違いない。もし、そうだとすれば、それは、弟子のプラトンにも言えることになるかと思う。確かにプラトンという人は、他人の書いたものを読んで理解するようなことはもとより、いわゆる「書き言葉（文字）」を自由自在に使いこなすことのできた極めて恵まれた文才を持った人であつたが、それでも、今日に比べれば、遙かに「話し言葉」中心の世界に生きていたこ

とに間違いはないだろう。だとすれば、プラトン自身、何らかの「記憶力の訓練」を行ない、それをしっかりと身につけていたとしても、何も不思議なことではない。そして、毎日のように起こる出来事や自分の「体験・経験」というものは、すべて一度限りのこととして、大事なことは、かなり真剣に見聞きしていたであろう。だとすれば、若いプラトンにとって、一生忘れられることのできない、あのソクラテスの「裁判の一部始終」は、恐らく、たった一度限りの極めて重大な出来事として、彼の「全神経（全精神）」を傾けて、極めて真剣に見聞きしていたとしても、何も不思議なことはないだろう。しかも、今日のわれわれのように、いわゆる書いたものやメディアにすっかり頼りきっている「忘れっぽい性格」に比べて、若いプラトンなどは、遙かに「記憶力の訓練」を身につけた、それゆえ、「記憶力に優れた」人物だったかも知れないのである。むしろその可能性のほうが遙かに高いと言えるものである。だとすれば、プラトンの書き残した、いわゆる『ソクラテスの弁明』なども、決していいかげんなものではなく、むしろそれなりの内容で再現されていると見るほうが、かえって自然で無理のない見方になるかと思う。

### 三、豊富な「記憶保存」や「情報伝達手段」

さて、「書き言葉（文字）」の使用によって、「記憶力の訓練」がなおざりにされるため、その結果として、「忘れっぽい性質」になりやすいというのは、個人差はあるにしても、確かに、そういう傾向を生み出すことは間違いないだろう。そして、現にわれわれは、「話し言葉」の世界だけに生きていた人たちよりも、遙かに「忘れっぽい性質」になっているに違いない。それは、何も「言葉」だけの問題ではない。例えば、われわれ現代人は、新聞、雑誌、書物、テレビ、ラジオ、映画、写真、動画、アニメ、漫画、イラスト、絵本、また、テープ、カセット、ビデオ、CD、DVD、パソコン、ケータイ、スマートフォン、タブレット、ツイッター、フェイスブック、その他の、いわゆる「記憶保存」や「情報伝達手段」の極めて恵まれた時代に生きていくことになる。それゆえ、その時にはそれほど真剣に見聞きしなくても、あとでじっくりと何度でも見聞きすることができるという利点があるわけである。しかし、そういうものなかった時代には、すべては一度限りの出来事であり、それゆえ、その時に見のがしたり、聞きのがしたりした時には、もう二度と見聞きすることができないわけである。あとは、他人からその様子を聞くことが残されているだけである。だとすれば、その人にとって大事なことは、かなり真剣に見聞きしていたに違いない。それに比べて、われわれ現代人は、ただ一度限りのこととして真剣に見聞きすることを「怠っている」傾向があるのではないかと思う。

例えば、旅行先でも、写真や動画などを撮ることばかりに夢中になり、自分の「目」でしっかりと見ることを怠ったり、また、人の話なども、カセットで録音を録っているからといって、その時にはそれほど真剣に相手の話を聞かなかつたりと。あるいはテレビやビデオあるいはDVDなどで見聞きするものは、すべて「間接的な知覚」でありながら、それをまるで実際に直接、見ているような錯覚に陥り、また、そこから受けた様々な印象や言動などを、そのまま盲目的に「事実や真実」であると思ひ込みやすい。また、書かれたものや印刷されたものなどに頼ることが多くなり、お互い親身にとことん「対話（議論）」などをし合うことが煩わしいことになりやすい。さらには、美術でも、音楽でも、美術全

集やCD、その他などに依存することが多くなり、美術品を直接、鑑賞したり、音楽を生で直接、聴くというようなことが少なくなったり、また、車の利用によって行動範囲が非常に拡大された反面、自分の足で歩いた速度でじっくりと風景を見るということを怠っている。また、われわれ人間の体の足腰が弱まるとか、その他、何であれ、一つ便利なものができると、その反面、何らかのマイナス面が生じることも多いのではないかと思う。

#### 四、ソクラテスやプラトンの時代

ところで、ソクラテスやプラトンなどの生きていた時代は、すでに「書き言葉（文字）」が活発に使用されていた時代ではあるが、それでも一般の人たちのなかには、書かれた文章の読めないような、そういう人たちもいたのである。それゆえ、「書物」を深く読んでそれを十分に理解でき得たのは、やはり、当時の「青年教育」を受けた人たちということになるのかも知れない。つまり、ソクラテスやプラトンなどの生きていた時代は、まだまだ「話し言葉」中心の時代だったということである。このことをすっかり忘れて、ソクラテスやプラトンなどが生きた時代を考えることは、極めて危険なことである。

つまり、当時、非常に隆盛を極めた、例えば、政治家の演説にしても、裁判における弁論術にしても、また、ディオニソス劇場などで上演された数多くの「悲喜劇」にしても、一般の人たちは、それらをすべて「耳」から入ってくる「音」として聞いていたわけである。つまり、書かれた文章を読んで理解していたのではなく、むしろ人間の「口」から発せられた「言葉」として、聞いていたわけである。つまり、この時代にあつては、いかに自分の「考えや想い」を大衆に向かって魅力的にアピールできるか、まさにその「話術」こそは、最も大事なことだったわけである。それゆえ、そのために、いわゆる「弁論術」や「修辞学」というものが盛んになるが、それは、書かれた文章がそのまま黙読で読まれることが期待されていたというよりは、むしろ人間の「口」から発せられ、「話し言葉」となった時に、その言葉が数多くの大衆に向かっていかに魅力的に聞こえ、また、いかに説得力のある文章となり得るかが、まさに大きな問題だったと言えるわけである。

つまり、今日のように、書かれた文章（書物）が、そのまま大きな価値を持つようには、一般にはあまり考えられていなかったに違いない。もちろん、知識人たちの間では非常に盛んになり、それゆえ、かなり価値を持ち始めていただろうが、それでもまだ、やはり「話術」のほうに遙かに大事な技術だったに違いない。そして、まさにそういう時代にソクラテスやプラトンなどは生きていたということである。つまり、まだ「話し言葉」中心の時代ではあつたが、それでも知識人たちの間では、文章を書いて書物を残すことが盛んになった時期でもあつたわけである。そして、それらを代表するのが、例のソフィストたちが始めた、いわゆる「弁論術」や「修辞学」などの大流行である。つまり、「弁論術」は、今までの「話し言葉」中心の時代には、恐らく、最も大事とされた「話術」の技術習得であり、それと同時に、どうすればより魅力的でより説得力に富む「文章（文体）」をつくり上げることができ得るかの、まさに「修辞学」の学習と習得になるかと思う。

もちろん、ソフィストたちの「弁論術」というのは、一般に、その「真偽や正邪」などをあまり問わず、とにかくどうすれば、大衆の心に大いにアピールし、心を惹きつけては、その人たちが説得することができ得るか、また、どのように話をすれば、相手との議論に

打ち勝って、自分たちの立場をより有利に展開することができるかなど、その「話術」(つまり「詭弁術」)を主に身につけるためのものだったわけである。一方、それに対して、ソクラテスやプラトンなどのように、人間や様々な物事の「本質、真実、真理、その他」などをあくまでも厳密に探究するという、そういう「哲学的問答法」(その話術)を身につけるのでは、極めて「対照的なもの」だったということである。

##### 五、「書き言葉」(「文章を書く」とは

さて、今までは「話し言葉」を中心に話をしてきたが、今度は、いわゆる「書き言葉」(つまり「文章を書く」という行為は、われわれ人間にいったいどのような影響をもたらしたのか? そのことについても、少し考えてみたいと思う。

例えば、「頭の中」だけで「ものを考えている」時には、人によっても違うだろうが、少し前に考えていたことを忘れてしまつて、「あれ、なんだっけ!」などと思ひ出しているうちに、今度は、「今まで考えていたこと」を忘れてしまつたり、と、そういう同じようなところで足踏みしたり、あるいはから回りなどをして、なかなか前に進めないことも、よくあることではないかと思う。また、「頭の中」だけで考えている時には、何か非常に優れた思いつきや考えのように思えたものも、それを実際に「文章」で書いてみると、意外にそれほどでもないことになりがちかと思う。もちろん、「ものを考える」という行為自体は、誰でも「頭の中」で行なっているわけだが、ただ「頭の中」だけでものを考えるという場合と、もう一つは、「図形や書き言葉」などを書きながら、ものを考えるという場合があるかと思う。そして、われわれ現代人は、「図形や書き言葉」などを使って物事を考えるということが、ごくあたり前のようになっているので、「頭の中」だけで物事をどんどん考え深めていくということは、恐らく、「話し言葉」中心の時代の人たちから比べれば、遙かに「苦手」になっているに違いない。それゆえ、例えば、ソクラテスやプラトンなどにしても、今日のわれわれがあれこれ想像する以上に、遙かに「得意」だったに違いない。つまり、「頭の中」だけでも非常に深くまで物事を考え深めていくことができたということである。しかも、大事なことなどは、忘れないようにするための「記憶力の訓練」を行ない、それをしっかりと身につけていたとしたら、彼らの「内的世界」は、非常に「豊かだった」に違いない。そして、何か必要なことなどは、主に、その人自身の「心の記憶保存室」から取り出していたことになるわけである。

ところが、われわれ現代人は、様々な「記録保存の手段」が豊富にあるために、いろいろなことを自分自身の「心の中」に記憶保存する代わりに、例えば、「書いたものや写真の中、ビデオやカセット、また、DVDやハードディスク、その他」のなかに記録保存することが極めて多いわけである。しかも、そうすることで、もう忘れないで済むということと、すっかり安心して、その人自身の「心の記憶保存室」にしっかりと正確に記憶保存することを怠ってしまう。そして、大事なことは、その人自身の「心の記憶保存室」から取り出すことよりも、その人自身の外にある様々な「記録されたもの」のなかから取り出すことが多くなるかと思う。もし、そうだとすれば、ソクラテスのように、ほとんどすべてを「心の記憶保存室」にしっかりと記憶保存していたことに比べて、われわれ現代人のように大事なことは、むしろ書いたものやDVD或いはハードディスク、その他などの中

に記憶保存してしまい、その人自身の「心の記憶保存室」には、かえって「大きっぱな記憶」だけになったり、あるいは書いたものやDVD或いはハードディスクの中に保存してあるので、安心して「忘れてしまう」という傾向になりやすいということである。もし、そうだとすれば、ほとんどすべてを「心の記憶保存室」にしつかりと記憶保存していたソクラテスの「心の中」は、非常に「豊かなもの」だったということである。そして、それらももちろん、ソクラテスだけの問題ではなく、いわゆる「話し言葉」中心に生きていた人たちの「心の中」とは、一般にそういう傾向があったかも知れない。つまり、すべては一度限りのこととして、今日よりも真剣に「見聞き嗅ぎ味ひ触れ感じて」は、それらほとんどすべてを「心の記憶保存室」にしつかりと蓄えていたということである。

もちろん、たとえ「記憶力の達人」と言えども、あらゆることをすべて正確に「記憶保存」することなど不可能のことである。それゆえ、書いたものやDVD或いはハードディスク、その他の「記録保存の手段」（方法）というものは、極めて大事なものであることは言うまでもない。ただ、そういうものばかりに頼りすぎて、自分自身の「心の中の豊かさ」がおろそかにされたのでは、まさに本末転倒になってしまうだろう。

#### 六、文章を書きながら、ものを考える

それでは、「文章を書く」などということとは、われわれ人間にとってそれほど大事なことではないのだろうか。むしろ、そういうことには決してならない。むしろ「話し言葉」と「書き言葉」の併用こそが、われわれ人類に想像を絶するほどの大きな役割を果たしてきたことは、まったく疑いようのないものである。そのことについて、ここではもう少し詳しく考えてみたいと思う。

\*

\*

それでは、ここで「文章を書きながら、ものを考える」という行為について、すこし考えてみたいと思う。もちろん、最初は、誰でも自分の「頭の中」で考えたり、思ったりしたことを、まず文章にすることから始めるわけである。そして、前に書いた文章につながる内容になるように、言葉を書き連ねていくことになるかと思う。そのようなことを繰り返しながら文章を書いていくうちに、自分でも思いがけないような「考えや想い」などがふと浮かんで来ることがあり、その思いがけないような「考えや想い」などをそのまま文章にしてみると、また、その文章によって、さらに、新たな「考えや想い」などが幾つか呼び覚まされることになるかと思う。それをまた文章にして書き連ねていくと、また、その文章が新たな「考えや想い」などを呼び覚ますというように、そのようなことを何度もくり返して考えを深めていくうちに、自分が最初に「頭の中」であれこれ考えていたものとは、非常に違ったものになり、自分でも思いがけないようなところに連れて行かれることが、非常に数多くあるということである。それが、すなわち、「文章を書きながら、ものを考える」ということであり、自分の「頭の中」だけで考えていたのでは、恐らく、思いもつかなかつただろうと思われる新しい「考えや想い」などが、文章を書くことによって、初めて呼び覚まされることがあるということである。つまり、文章を書きながら、考えを深めていくことができ得るということである。それが、「文章を書きながら、ものを考える」という行為の最大の長所になるかと思う。そして、プラトン自身、文章を書きな



がら、そのような経験を何度ともなく実感していたことは、恐らく、間違いないことだろう。それゆえ、「文章を書く」という行為には、間違いなく、われわれ人間の「思考（思索）能力」をより深める働きがあるということである。

\*

\*

つまり、自分の「頭の中」だけで考えていたのでは、恐らく、なかなか思いもつかなかったであろう自分でもびつくりするような「考えや想い」などが、文章を書きながら考えていくうちに、ふと呼び覚まされることが少なからずあるということは、すなわち、「文章を書く」という行為自体には、われわれ人間の「思考（思索）能力」をより深める働きが、間違いなくあるということである。それゆえ、「話し言葉」だけではなく、「書き言葉」を併用するようになったことが、われわれ人類の「思考（思索）能力」をさらに飛躍的に高め、かつ深める結果になった最大の要因の一つになり得るということである。

そして、そのようにして書かれた文章をやがてまとめ上げて、いわば「一冊の書物」にすれば、その書物のなかには、それを書いた人の様々な「考えや想い」などがそのまま書き残されて記録保存されることになるわけである。そして、その後、その書物を手にした人たちは、その書物に書かれている内容を読んで理解しようと努力をすることになるが、その「努力」、つまり、「書物を深く読んで、そこに書かれている内容をできるだけ正確に理解しようとする努力行為」自体が、結果として、その人の「知的能力」（つまり「思考《思索》能力」）を真に鍛え、育て上げることになるとともに、そこに書かれている様々な「考えや思想」などを学ぶことにもなるわけである。そして、そのように深く読み学んだ「考えや思想」を十分に消化することによって、それらをもとにして、より新しいより深い「考えや思想」などを生み出すことにもなるわけである。例えば、プラトンが書き残した数多くの「著作」が、その後のわれわれ人類に与えた影響というものには、計り知れないものがあつたかと思う。まさにそういうことが、「話し言葉」だけでは得られなかった利点の一つであるとともに、われわれ人類の「思考（思索）能力」をさらに高め、かつ深めることになった最大の要因の一つでもあるということである。

## 七、世界の「四大聖人」

つまり、「話し言葉」だけの世界では、たとえ一人の天才が誕生しても、その「考えや思想」というものは、その人の死とともに消えてしまうか、あるいはたとえ口伝えに伝えられたとしても、だんだんと違ったものになってしまう危険性があるということである。だとすれば、「話し言葉」だけの時代にも極めて優れた人たちがそれなりにいたとしても、何も不思議なことではない。ただ、その当時には、いわゆる「書き言葉」がなかったために、これという「記録」が何一つ残されていないというだけなのかも知れない。

例えば、世界の「四大聖人」と呼ばれている、いわゆる「ソクラテス、シャカ、孔子、そして、キリスト」という人たちは、一般に書物を書き残さなかったと言われているかと思う。それゆえ、若しもその弟子たちが、彼らの「言動」を書き残さなかったならば、彼らの「考えや思想」というものは、恐らく、永遠に消えてしまったかも知れない。たとえ口伝えに伝えられたとしても、もちろん、実際、そういう時期はあつたわけだが、しかし、時代の流れとともに、その内容は、どうしても変化しやすいものである。確かに「書いた

もの」を必要以上に過大評価するのは危険なことであるが、しかし、一方、書いたものがまったくなかったならば、その人が存在したということすら、永遠に闇に消えてしまったかも知れないのである。それゆえ、われわれ人類にとつて真に「価値や意義」のあるようなものであれば、何らかの形で書き残しておくことも、非常に大事なことになるかと思う。

#### 八、「書物」(書籍類)の役割

さて、「一冊の書物」として書き記しよされたものは、結果として、ふつう数多くの人たちに読まれることになる。それは、例えば、ある地域やある国内だけに留まらず、時には世界中の各国の様々な「言葉」に翻訳されて、読まれることになる。しかも、それは、一部の知識人だけに独占されて読まれるものでもなく、あらゆる分野(領域)の人たちが読みたいと思えば、いくらでも様々な「書物」を読んで、そこからいろいろな「考えや思想」などを学ぶことができるわけである。そのように「書物」というものが、われわれ人類に果たして来た役割というものは、想像を絶するほど大きなものがあつたかと思う。それは、まず、様々な「考えや思想」などを「書物」のなかに書き記すことによつて、それがそのまま長く記録保存されるということが、一つあるかと思う。そして、もう一つは、そのような「書物」がある地域だけに留まるのではなく、世界中の数多くの人たちに読まれることによつて、そこに書かれている様々な「考え」や新しい「学問的知識」などが、「話し言葉」だけの時代では到底考えられないほど、世界中のありとあらゆる地域まで広まることを可能にしたということである。

つまり、われわれ人類が獲得した様々な「知識の保存」と、その「知識の普及」とに絶大な役割を果たして来たものが、まさに「書物」(書籍類)であつたということである。しかも、「本を読む」という行為、つまり、「読書」というものが、ただ単に「本を読んでも、そこに書かれている何か新しい知識」などを得るということだけに留まらず、「本を読んでも、そこに書かれている内容をできるだけ正確に理解しようと努力する」ことが、結果として、われわれ人間の「知的能力」(つまり「思考」《思索》能力)を真に鍛え、育て上げることになつたという長所も、同時に持ち合わせているということである。

\*

\*

それゆえ、「文章を書く」という行為とその結果には、様々な「利点」があるということである。まず第一に、自分の「頭の中」だけで考えていたのでは、恐らく、一生涯、思いもつかなかつたであろうような自分でもびっくりするような「考えや思想」が、「文章を書きながら、ものを考えるという行為」によつて、はじめて呼び覚まされることが少なからずあるということである。そして、そのようにして、その人なりの「考えや思想」あるいは学問的な「研究成果」などを文章で書き記すことによつて、それがそのまま「記録保存」されることになるとともに、それが、「書物」(書籍類)としてやがて公表されれば、その書物を手にして読もうとする世界中のありとあらゆる分野(領域)の人たちによつて、幅広く読まれることになるかと思う。そのことが、すなわち、様々な「知識の普及」につながることもなるわけである。そして、「本を読む」(つまり「読書」)をする人たちにとつて、その本から「様々な知識」などを得ることができただけではなく、その人自身の「知的能力」(つまり「思考」《思索》能力)を真に鍛え、育て上げることもでき得

るといふような、そういう様々な「利点」があるといふことである。もちろん、「書かれたもの」（書物）を必要以上に過大評価することは、プラトンがはっきりと指摘しているように、危険なことではあるが……。

#### 九、「話し言葉」と「書き言葉」の併用

われわれ人類が、いわゆる「話し言葉」と「書き言葉」とを自由に使いこなせるようになってから、われわれ人類の「文化・文明」が急速に「発展、進歩」するようになったことも、間違いない事実なのである。——それは、われわれ人類が得た実に様々な「知識」などが書物のなかに書き残され、それを読んで学んだ人たちが、その知識をもとにして、新しい「考えや技術」などを生み出し、その新しい「考えや技術」などがまた書物のなかに書き残され、それを読んで学んだ人たちが、その新しい知識をもとにして、さらに新しい「考えや技術」などを生み出し、その「知識」がまた書物のなかに書き記され、それを読んで学んだ人たちが、それらの知識をもとにして、さらにより新しい最先端の「考えや技術」などを考え出すというように、次から次へと、古代や中世は、比較的ゆっくりと、そして、近代以降は極めて急ピッチで、その時代その時代の最先端の「知識や技術」などを、主に「書物」（書籍類）を通じて学び、消化し、それらの知識をもとにして、さらにより新しい最先端の「知識や技術」などを生み出して来たといふことである。

\* \*  
もちろん、書物だけがその役割を果たして来たわけではない。何よりも最初にその時代その時代に知的に優れた人たちが、まず存在して、その人たちが、例えば、その場にいる人たちに教えるといふことを初めとして、修道院や寺院（或いは寺子屋）、また、学校教育、その他で、多くの人たちに教えるという直接的な行為があったわけである。そして、それこそが、まず第一であり、プラトンも、その『パイドロス』という著作のなかで第一と考えているのは、「……ひとがふさわしい魂を相手に得て、哲学的問答法の技術を用いながら、その魂の中に言葉を知識とともにまいて植えつけるときのことだ。その言葉といふのは、自分自身のみならず、それを植えつけた人をもたすけるだけの力をもった言葉であり、また、実を結ばぬままに枯れてしまうことなく、一つの種子を含んでいて、その種子からは、また新たな言葉が新たな心の中に生れ、かくてつねにそのいのちを不滅のままに保つことができるのだ。そして、このような言葉を身につけている人は、人間の身に可能なかぎりの最大の幸運を、この言葉の力によってかちえるのである。……」（276E～277A）

\* \*  
つまり、ソクラテスやプラトンのような真に優れた「魂」と様々な問題で親しく「対話（吟味）活動」を積み重ねることによって、ソクラテスやプラトンの「肉声（言葉）」が、その人の「心の中」に「生きた言葉」として蒔かれ、植えつけられては、その「生きた言葉」の中に宿っていた「知識の種子」が、その人の「心の中」でも芽を出し、成長し、やがてはその人も同じように「知識の種子」を含んだ「生きた言葉」を数多く生み出せるようになるというのが、まさに「最上（最善）」であることは、まったく疑う余地はない。しかし、一方、いわゆる「書物」を通して、古今東西の真に優れた数多くの「魂」と親

しく交わることも、決してそれに劣らず有意義なことであることは、もう何度も説明しているところである。また、その時代その時代に知的に優れた人たちが、まず存在して、その人たちが、例えば、その場で教えるということを初めとして、修道院や寺院（或いは寺子屋）、また、学校教育、その他で、多くの人たちに教えるという直接的な行為があり、その時にも、「書いたもの」（書籍類）は、多くの場合、必要不可欠なものであり、教える人たちも最先端の「知識」をどこから得たかと言え、その多くは、結局、人から直接、教えてもらうか、あるいは「書物」（書籍類）からということになるのだろう。それゆえ、「書物」（書籍類）が、われわれ人類に果たしてきた役割というものは、想像を絶するほど極めて大きなものがあったということである。それは、今日でも、「話し言葉」と「書き言葉」の併用という点では、基本的には何ら変わることはないだろうと思われる。ただ今日では、いわゆる「ニューメディア」（例えば「インターネット」）などの普及により、従来のように「書物」（書籍類）が、その主流であったものから、これからは、例えば、テレビをはじめ、パソコンやスマートフォン或いはタブレット、また、DVDやハードディスク、その他の実に様々な「記録保存」や「情報伝達手段」（方法）が増えてきているので、そういう意味では「新しい時代」を迎えていることになるのかも知れない。

#### 十、プラトンの「書物」に対する「考え方」

ところで、プラトンは、書かれたもの（つまり「書物」）に対しては、どのような「考え方」をしていたのだろうか。それは、例えば、『第七書簡』の中では、次のように語っている。「……すなわち、書かれていることから、著者にとつて、いやしくも彼がみずから真摯であるからには、なにもとくに真剣な関心事ではなかったのであり、特別の関心事は、むしろ彼の胸中最も美しい領域に、どこにもなく伏せられてあるのだ……」。「……それゆえ、こころある人ならば誰も、けつして、みずからの知性において把握されたものを、ことばという器うぐわに、ましてや取り換えきかぬ器に、——とは、文字でもって書かれるものにといいことなのだが、あえて盛ろうとはしないであろう……」と（34A）。

\*

\*

これらの「言葉」をそのまま信ずるならば、プラトンは、彼にとつて最も大事とされることならについては、その数多くのどの「著作」の中にも書き記さなかったということになる。そして、敢えてもつと極端に言えば、それほど大事とは思えないようなことは書いたけれども、最も大事なこと、あるいは特別の関心事は、すべて自分の胸中最も美しい領域に伏せられてあるのだと。だから、私の書いた本などをあれこれ読みあさって、それでも何もかも知り得たような顔をしているのは、大ばか者だということになるわけである。それでは、プラトンは、自分の「著作」をいいかげんに手抜きで書いたのだろうか。むしろ、そうではないだろう。それは、真の「哲学者（愛知者）」であるプラトンにとつて、手抜きで「書物」を書くなどということは、たとえしようと思ってもでき得なかつたに違いない。なぜなら、真知を愛し求めてやまない真の哲学者の「精神」が、それを許さない。たとえいいかげんな文章を試しに書いたとしても、すぐに自分で消してしまっただろう。自分の心に合わないものをそのまま書き記すなどということは、断じてできない。それが、真の文筆家の「精神構造」だからである。確かに、自分の「無知や勘違い」などから、結

果として、間違ったことを書いてしまうことがあるかも知れない。しかし、それは、好んで「うそやでたらめなこと」を書こうとしたわけではない。だから、もしそのことに最初から気づいていたらならば、何も他人からあれこれ言われるまでもなく、自分で最初から書きなおしていただろう。そのようにプラトンほどの真知を愛し求めてやまない「精神」では、手抜きで「書物」を書くなどということは、たとえしようと思ってもできないことである。それゆえ、『第七書簡』でプラトンが言いたかったことは、「哲学」そのものの奥義を語ることは、極めて難しいことであり、そういうことも分ならず、読みかじりの浅薄な知識などを振りかざして、もう何もかも知ったつもりで得意になっているような人や、また、それをもとに中途半端な「書物」などを書いたりする人たちがふえるくらいならば、むしろ書物という誤解されやすいものなど書かない方がよく、自分の胸中最も『美しい領域』に隠し置いた方がましだと言っているのである。だから、一般の人たちが読んでも決して理解できず、それゆえ、誤解される心配のまったくくないような記述方法で、しかもわずかの示唆をたよりに自力で発見することのできる少数者のためなら、書いてもよい。いや、すでにもう書き記しておいたのだ。では、それはどこにと問われれば、それこそ、まさに『国家』編の中に出てくる、いわゆる「三つの比喩」の中にある。そして、プラトンが書き遺したこの「三つの比喩」こそは、二千数百年以上経った今日でも、未だにその「謎（真意）」が解明されていないものの一つになるのだろう。その二千数百年来の「謎」に対して、敢えて挑戦しようという試みを、これから始めてみたいと思うわけである。

令和二年二月吉日（最終版）

如月翔悟

プラトンの「三つの比喩」

## 太陽の比喻

## 「太陽の比喩」について

それでは、プラトンのその極めて有名な「善のアイデア」について、ここで本格的に考えてみたいと思うが、その学ぶべき最大の学業としての「善のアイデア」については、それがそのまま語られているのではなく、いわゆる「三つの比喩」（それは「太陽の比喩」と「線分の比喩」それに「洞窟の比喩」という形で語られているものである。それでは、なぜそのような形で語らねばならなかったのか？ その問題から考えてみたいと思う。

まず、プラトンの『国家』編のなかでは次のように説明されているので、それを引用してみたいと思う。「……私としては、あなたが〈正義〉や〈節制〉その他について話された、あれと同じ仕方だ。〈善〉についても説明してくださるなら、それで満足するでしょうから」。それに応えて、ソクラテスは、「……それはもう、このぼくにしても、君、それができたなら、大いに満足だろうよ。しかしぼくにはできないだろうし、できないのに気持ちだけが先に立って不体裁を演じ、笑い者になることだろうと、それが心配なのだ。

いや、幸福なる諸君よ、さしあたっていまのところは、〈善〉とはそれ自体としてそもそも何であるかということは、わきへのけておくことにしよう。なぜなら、それをとにかくぼくが何であるかと思うことだけでも、そこまでいま到達するのは、現在の調子ではぼくの力に余ることのように思えるからだ。そのかわり、〈善〉の子供にあたると思われるもので、〈善〉に最もよく似ているように見えるものを、もし諸君もそれでよいと思うなら、語ることにしたいのだ。だが、それではだめということなら、やめておこう」。

（『国家』506D～E）

\*

\*

ここには、プラトンの極めて「素直な心の動き」がそのまま描かれている。——というもの、いかなる傑出した人物であっても、若しも作中のソクラテスがこれから語ろうとしている「善のアイデア」というものを、できるだけ正確に説明しようと思えば、必ず作中のソクラテスとまったく同じような「思い」に襲われることは間違いないからである。——つまり、それほどまでに「言葉を以って説明すること」と「極めて難しい問題である」ということである。それゆえ、敢えて言葉で語ろうとすれば、どうしても「比喩的に語る」しかなかったであろう。それほどまでに語ることの難しい問題なのである。（もちろん、それと同時に、プラトンは、一般の人たちには決して理解できないような複雑な表現方法を採用したということである。）

だが、そこは、極めて文才に恵まれたプラトンであるので、やがて「太陽の比喩」という形で、〈善〉について語り始めることになるわけだ。ただその前に、本文では、もう一度、「アイデア」についての再確認が行なわれることになる。つまり、「……多くの美しいものがあり、多くの善きものがあり、また同様にしてそれぞれいろいろのものがある」が、そういうものは、「……見られるけれども、思惟によって知られることはなく」、一方、「……〈美〉そのものがあり、〈善〉そのものがある」が、そういう「……実相（アイデア）は思惟によって知られるけれども、見られることはない」というものである。

ここで、プラトンは、いわゆる「肉眼によって見ることのできる世界」（それは「可視界」であり、「生成界」でもあるもの）と、もう一方の「思惟によって知られる世界」（それは「可知界」であり、「実在界」でもあるもの）とを、まずはっきりと区別しておく必



要があったからだろう。そして、「肉の眼」はもちろん、「可視界」で見る役割をするものであり、そして、もう一方の「魂の眼」は、いわゆる「可知界」で観る役割をするものになるということである。

#### 一、「可視界」と「可知界」

ところで、われわれ人間が「ものを知る方法」には、大別すれば、次の「二つ」しかない。一つは、われわれの「諸感覚」（見聞き嗅ぎ味ひ触れ感すること）などを通して、「知る方法」であり、これが、いわゆる「感覚界」である。そして、もう一つは、われわれの「思惟活動」などによって、「知る方法」であり、それが、いわゆる「思惟界」である。一方、プラトンは、いわゆる「可視界」と「可知界」というような言葉を使っているが、それらは、いったいどのような「意味合いのもの」になるのだろうか？（ここでは、まず、それらの「言葉」の確認をしておきたいと思う。）

まず、「可視界」という言葉であるが、これは、「目」で見ることができるといえる世界のことであり、われわれが毎日様々なものを「目」を通して見ることができるといえる「現実の世界」のことである。そして、「感覚界」というのは、「目」だけではなく、その他の「耳、鼻、口、皮膚」などが加わり、それだけ範囲が広がることになるが、基本的には「可視界」と同じものになるかと思う。ただ、プラトンが考える「可視界」（つまり「生成界」というのは、そのような「感覚界」だけではなく、それに加えて、いわゆる「魂の眼」を「生成界」に向けて、物事の「真実、真理、その他」などを厳密に探究するという、一般の「学問的探究方法」（それは「思惟界」の半分）をも含まれているということである。）

次に、「可知界」という言葉であるが、これは、「思惟によって知られる世界」のことであり、この領域は、「魂の眼」を「生成界」ではなく、むしろ「実在界」の方に向けて、物事の「真実、真理、その他」などを厳密に探究するという、もう一つの、一般の「学問的探究方法」（それは「思惟界」の残り半分）であり、それは、いわゆる「数学的諸学科」などが、まさにそれにあたるということである。そして、そのような「数学的諸学科」をしつかりと学ぶことによつてこそ、われわれ人間の「魂の眼」を上の方へと上昇させることはでき得るが、しかし、遙か彼方にある最究極の「真実、真理、その他」などを観て取ることができ得るのは、そのような一般の「学問的探究方法」ではなく、もう一つの、「哲学的探求方法」（つまり「哲学的問答法」）によるしかないというのが、まさにプラトンの「基本的な考え方」になるかと思う。

\*

\*

つまり、われわれ人間というのは、古代、中世、近世、近代、現代という時代の流れのなかで、実に様々な「真実・真理」などをとらえてきたわけであるが、しかし、現時点で「真実・真理」とされているものも、次の時代にはもう「真実・真理」ではないという場合もあるかも知れない。それゆえ、われわれ人間というのは、遙か彼方にある最究極の「真実、真理、その他」などを愛求して、無限に果てしなくどこまでも問い続けてやまない永遠の「愛知者」ということになるかと思うが、その遙か彼方にある最究極の「真実、真理、その他」などの領域（世界）こそは、まさに「叡知界」（つまり「イデア界」）であり、その「叡知界」（つまり「イデア界」）には、最究極の「真実、真理、その他」などであ

る、例えば、正義そのもの、勇氣そのもの、節制そのもの、美そのもの、その他、そういう様々なアイデアなどが存在することになり、そのような「アイデア」を観て取ることができ得るのは、いわゆる「哲学的探求方法」(つまり「哲学的問答法」)によるしかないというのが、まさにプラトンの考え方になるということである。

## 二、「言葉」の確認

それでは、前述からの「目」とか「肉眼」、また、「魂の眼」とか「心の眼」とか、その他、そういういろいろな言葉が数多く出てくると思うので、ここでそれらをはつきりと「確認」をして、言葉から生じる「誤解や混乱」などを取り除きたいと思う。

まず、われわれ人間の「感覚受容器」の一つである「目」について、いろいろな言葉が使われています。例えば、「目」、「肉眼」、「肉の眼」、その他、これらはすべて同じものである。——一方、「魂の眼」という言葉があるが、この言葉についても簡単に説明しておきたいと思う。ここでいう「魂の眼」とは、例えば、「目」を伏せて、ものを考えるところになる。しかし、その人の「頭の中」(或いは「心の中」)では、実にいろいろなものを想像(イメージ)することができるところである。例えば、富士山という山の名前を聞けば、われわれ日本人の「頭の中」(或いは「心の中」)では、すぐに富士山を思い出して、その姿をはつきりと観ることができる。それは、何も実際に存在するものでなくてもよいわけだ。例えば、中国には「竜門の滝」という話があるが、それは、竜門という非常に流れの激しい滝があり、それゆえ、その激しい滝を登りきるのは至難の業わざになるわけである。しかし、それでも数多くの鯉たちは、その滝を登ろうと必死で何度も挑戦を繰り返していくうちに、その数多くの鯉のなかから、やがて一匹の鯉がやつの思いで上まで登りつめたところで、その鯉は、一瞬にして、「龍の姿」となって天に舞い昇るといふものである。そのような話でも、われわれの「頭の中」(或いは「心の中」)では、その人なりであれば、これ想像(イメージ)し、鮮やかに観ることができるといふことである。

さらに、われわれの「頭の中」(或いは「心の中」)では、例えば、約一三八億年前に、いわゆる「ビッグバン(大爆発)」から始まったという宇宙の誕生、そして、銀河の誕生、また、われわれの太陽系がどのように誕生し、その中のわれわれ「地球」の歴史についても、その地球の誕生や生命の誕生、また、様々な生物の進化や巨大な爬虫類の様子、そして、われわれ人類の誕生と今日までの歴史、——つまり、「自然(物質)界や動物(植物)界、そして、われわれ人間社会や広大な宇宙空間その他」、それらの「過去、現在、未来」という、ありとあらゆる時間と空間とを自由自在に行き来し、その人にとって可能な限りのありとあらゆるものを「頭の中」(或いは「心の中」)で、あれこれ想像(イメージ)し、観ることができるといふことである。そして、その想像して観るといふ役目をしているのが、まさに「魂の眼」(或いは「心の眼」といふことになるわけである。

それゆえ、「魂の眼」は、すべての人がすべて同じ程度の「能力」を持っているということではない。むしろその人の「知的能力」や「思考(思索)能力」などによって、まったく違ってくるものである。例えば、広大な「宇宙」をあれこれ想像するにしても、素人の人があれこれ想像するのと、「宇宙」の研究を長年に渡って専門に取り組んできた専門

家が、あれこれ想像するのでは、まったく違ってくるだろう。それは、ほかのすべてのことについて言えることである。それゆえ、「魂の眼」というのは、その人の人間としての総合的な「知的能力」や「思考（思索）能力」によって、それぞれ「個人差」がはつきりと生じてくるものである。——つまり、「魂の眼」とは、すなわち、その人の人間としての総合的な「知的能力」や「思考（思索）能力」そのものである。そして、その「魂の眼」の「観る能力」は、その人の人間としての総合的な「知的能力」や「思考（思索）能力」などにほぼ正比例することになるかと思う。——それをプラトン風に言えば、「魂の眼」とは、すなわち、「理知的部分」（それは「知性＋理性＋母体のようなもの」）にあたりるとともに、その「理知的部分」の各人の「知的能力」や「思考（思索）能力」には、自ずとはつきりとした「個人差」があるということである。（ちなみに、「心の目」「魂の目」「心の眼」「魂の眼」などは、すべて同じものである。）

### 三、「目」の独自の特徴

それでは、再び、「太陽の比喩」にもどりたいと思う。——登場人物のソクラテスは、「イデア論」のあとで、われわれ人間の「目」については、次のように説明をしている。それを簡単に要約すると、「……われわれの『目』というのは、その他の『耳、鼻、口、皮膚、その他』の諸感覚とは少し違って、見るもの（つまり目）と見られるもの（様々な対象）の間には、ほかに何かが必要であり、それは、『光』である」と説明をしている。つまり、——「光」の満ちている昼間であれば、われわれの「目」には、外界の様々なものはつきりと見えて、どこに何があり、また、どのようになっているかという様子が極めて細かな所まではつきりと見えて、様々な識別も微妙のところまで可能になるわけである。ところが、「光」の極めて乏しい夜間になると、まったく同じところに立ち、同じように見ても、われわれの「目」には、昼間とはまったく違って、外界の様々なものがぼんやりとしか見えない。それゆえ、様々な識別も非常に難しくなり、細部のところなどは、まったく不可能なことになるといふことである。

つまり、われわれの「目」が、外界の様々なものはつきりと見ることができるとともに、どうしても何らかの「光」が必要になつてくるということである。もちろん、この世に「光」を放つものは、実に数多くあるわけである。——例えば、ろうそく、懐中電灯、ランプ、室内照明、外灯、乗り物の照明、競技場などの照明灯、あるいは、マッチ、ライター、様々な燃え火、そして、太陽（恒星）、その他、もう実にいろいろなものがあるかと思うが、そのなかでも、やはり最大にして最高のものはと問われれば、それは、言うまでもなく、いわゆる「太陽（恒星）」ということになるわけである。

しかも、われわれ人間は、遙か遠い大昔から、「太陽」というものに対しては、極めて特別の感情を抱いてきた。それは、「……太陽があればこそ、われわれは、こうして生きていられる。もし太陽がなくなれば、われわれは、一時たりとも生きてはいられない」という極めて素朴な感情であり、それは、「太陽」というものが、われわれ人間に数多くの恵みをもたらしてくれるものであり、それゆえ、「太陽」を自然と崇めるような「風習（習慣）」を生み出し、いわゆる「太陽神」という形で、この地球上のほとんどすべての民族が、そのような素朴な感情（信仰）を抱くようになった理由でもあるわけだ。つま

り、遙か遠い大昔から、「太陽は、『善』（よいもの）の象徴であり、また、愛の象徴ともなり得ている」ということである。

むしろ、「太陽」は、われわれ人間に「善いこと」だけをもたらすものではない。時には日照りが長く続いて、いわゆる「干ばつ」というような事態になれば、実にいろいろな「農作物」が枯れたり、また、水不足や食糧不足などによって、そこに生息する野性の「動物」などを初めとして、われわれ「人間」にも直接、様々な被害をもたらすことも少なくないということである。

それでも、「太陽」が、この地球上のあらゆる「生命体」（生物）を育て、いつくしんでいることも、また、間違いないことなのである。それゆえ、必要な量の「雨」さえ降ってくれば、まさに「太陽」こそ、最大の「善」（よいもの）であり、「……太陽があればこそ、われわれは、こうして生きていられる。もし太陽がなくなれば、われわれは、一時たりとも生きてはいられない」という極めて素朴な感情が、自然と生まれてきたとしても、何も不思議なことではない。しかも、「太陽」がなくなれば、実際、われわれの「地球」も同時に存在できなくなるわけだから、なおさら、「太陽」の存在と、そこから放射される「光と熱」とは、いついかなる時代の人たちにとっても、最大の「恵み」であり、それゆえ、「感謝の対象」ともなり得ているということである。

#### 四、「太陽」と「善のアイデア」の対比

さて、話を元に戻したいと思うが、われわれの「目」が外界の様々なものをはっきりと見ることができるのは、そこに何らかの「光」があるからである。もし「光」がまったくなければ、何も見ることができない。そのように「可視界」では、「太陽」が皆さんと光り輝いているからこそ、われわれの「目」は、外界の様々なものをはっきりと見ることができるとともに、あれこれの対象を細かなところまで識別することも可能となるのである。——それと同じように、われわれ人間の「魂の眼」が上の方へと上昇していき、そこにある様々な「アイデア」を観て取ることができるのも、その領域には「善のアイデア」が一きわ光り輝いているからであり、若しも何の光もない「暗闇の世界」であれば、われわれ人間の「魂の眼」は、何一つ観て取るということができないことになるだろう。

つまり、「可視界」では、「太陽」が皆さんと光り輝いていることによって、われわれの「目」は、外界の様々なものをはっきりと見ることができるとともに、いろいろな対象を細かなところまで厳密に識別することも可能になるということである。逆に言えば、「太陽」が皆さんと光り輝いていない夜の「暗闇」のなかでは、われわれの「目」は、外界の様々なものをはっきりと見ることができなければ、ましていろいろな対象を細かなところまで厳密に識別することなど、まったく不可能なことになるわけである。

それと同じように、「可視界」では、いわゆる「善のアイデア」が一きわ光り輝いていることによって、われわれ人間の「魂の眼」は、様々な「アイデア」を観て取ることができるとともに、それぞれの「アイデア」の細かなところまで厳密に識別することも可能になるということである。逆に言えば、「善のアイデア」が一きわ光り輝いていない「暗闇」の状態であれば、われわれ人間の「魂の眼」は、様々な「アイデア」を観て取ることもできなければ、ましてやそれぞれの「アイデア」の細かなところまで厳密に識別することなど、まった

く不可能なことになるわけである。

そして、「太陽」というのは、「可視界」において、「まさに光源体（光の源）である」とともに、われわれの「目」を通して、外界の様々な事物をはっきりと見せてくれているものになるわけだ。つまり、「太陽の光」がなければ、われわれの「目」は、何も見ることはできない。「太陽の光」があればこそ、われわれの「目」は、外界の様々なものを見ることが可能になる。つまり、「見る機能」を授かることになるわけである。

同じように、「善のイデア」というのは、「可知界」において、「まさに一きわ光り輝いているものである」とともに、われわれ人間の「魂の眼」を通して、様々な「イデア」を観て取れることを可能にしてくれるものになるわけだ。つまり、「善のイデアの光」がなければ、われわれ人間の「魂の眼」は、何一つ「イデア」を観て取ることができない。「善のイデアの光」によってこそ、われわれ人間の「魂の眼」は、様々な「イデア」を観て取ることが可能になる。つまり、「観て取る機能」を授かることになるわけである。

これが、プラトンのあの有名な「三つの比喻」のなかの一つとして登場してくる、いわゆる「太陽の比喻」のなかで語られている最も「大事な要点」になるかと思う。

## 五、「光」の再確認

それでは、ここで、もう一度、それらのものを「再確認」しておきたいと思う。例えば、「太陽」だけが「光」を放っているわけではないだろう。その他にも、例えば、ろうそく、マッチ、室内照明、外灯、様々な乗り物の照明、燃え火、その他、もう実にいるいろいろなものがあるではないかという素朴な疑問があるかと思う。もちろん、その通りであり、この世で「光」を放っているものは、実に数多くあるわけである。ただそのなかでも「最大にして最高のもの」と問えば、それは、まさに「太陽（恒星）」であるということである。つまり、「光」を放っているものは、この世に数多くあるけれども、その代表として、「太陽」が選ばれたということである。——というのも、例えば、ろうそく、マッチ、室内照明、外灯、様々な乗り物の照明、燃え火、その他などは、ほんの一部を照らし出しているに過ぎない。それに比べて、「太陽」は、まさに地球全体を明るく照らし出しているものであり、しかも、この地球上のありとあらゆる「生命体」（生物）を真に育て、いつくしんでいるものであれば、なおさら「光」のなかでも「最大にして最高のもの」になるとともに、それは、いわゆる「可視界」で最も光り輝いているものでもあるわけである。

## 六、「叡知界」（「イデア界」）とは

それでは、プラトンが考えるもう一方の「可知界」（そこで観て取る「叡知界<sup>イデア</sup>」）というものは、具体的にはいったいどういうものになるのか？ この『国家』編を読む限りにおいては、その「姿」というものは、はっきりとは見えてはこない。——その遙か彼方にある最究極の「真実、真理、その他」などの領域（世界）である、いわゆる「叡知界」（つまり「イデア界」とは、いったいどこかというところなのか？ ぜびとも知りたくなるところである。そこで、プラトンは、次の『パイドロス』という著作のなかで、その「姿」をはっきりと描き出すことになるわけである。それは、次のようなものである。

\* \* \*

つまり、「…天界においては、神々の行進というものがあり、不死と呼ばれる神々の魂は、宙のきわまるところまでのぼりつめるや、天球の外側に進み出て、その背面上に立つ。回転する天球の運動は、そうして立った魂たちを乗せてめぐりはこび、魂たちはその間に、天の外の世界を観照する。

天のかなたのこの領域のことを、地上の詩人の誰ひとり、それにふさわしく讃えうたった者はなく、これから先もけつしてないであろう。だが、それはつぎに話すようなものである。ひとは、とくにほかならぬ真理について語ろうとするとき、真実ありのままを語る勇気をもたなければならぬのだから。

まことに、この天のかなたの領域に位置を占めるもの、それは、真の意味においてあるところの存在——色なく、形なく、触れることもできず、ただ、魂のみちびき手である知性のみが観ることのできる、かの《実有》である。真実なる知識とはみな、この《実有》についての知識なのだ。されば、もともと神の精神は——そして、自己に本来適したものを撰取しようと心がけるかぎりのすべての魂においてもこのことは同じであるが——けがれなき智とけがれなき知識とによつてはぐくまれるものであるから、いま久方ぶりに真実在を目にしてよるこびに満ち、天球の運動が一まわりして、もとのところまで運ばれるその間、もろもろの真なるものを観照し、それによつてはぐくまれ、幸福を感じる。一めぐりする道すがら、魂が観得するものは、《正義》そのものであり、《節制》であり、《知識》である。この《知識》とは、生成流転するような性格をもつ知識ではなく、また、いまわれわれがふつうあると呼んでいる事物の中であつて、その事物があれこれと異なるにつれて異なつた知識となるごとき知識でもない。まさにこれこそほんとうの意味であるものだという、そういう真実在の中にある知識なのである。

魂はこのほかにも、さまざまの真実在を同じようにして観照し終え、その饗宴を楽しんでしまうと、ふたたび天の内側にはいつて、神々のすみかへと帰つて行く。……」（『パイドロス』(24C～E)。

これが、まさにプラトンの「叡知界」（つまり「アイデア界」であり、もちろん、「実在界」でもあるわけである。そして、その「アイデア界」にある「…：実在及び実在のうち最も光り輝いている」(518)のが、まさに「善のアイデア」であり、その次に光り輝いているのが、恐らく、「美のアイデア」ということになるのだろう。

## 七、〈善〉と〈太陽〉との関係性

さて、引用が長くなつたが、ここでプラトンの『国家』編のなかではどのように語られているのかを、その「文章」に添つて一つ一つ考えてみたいと思う。それゆえ、引用文が多くなるが、それは、できるだけ「本文」に寄り添つて考えてみたいと思うからである。

まず、登場人物のソクラテスは、「目」と「太陽」との関係について語つたあと、次のように説明をしている。つまり、「…：それでは、ぼくが〈善〉の子供と言つていたのは、この太陽のことなのだ」と理解してくれたまえ。〈善〉はこれを、自分の類似的なものとして生み出したのだ。すなわち、思惟によつて知られる世界において、〈善〉が〈知るもの〉と〈知られるもの〉に対してもつ関係は、見られる世界において、太陽が〈見るもの〉と

〈見られるもの〉に對してもつ関係とちよつど同じものなのだ。……」（『国家』508 C）  
ここでは、〈善〉と〈太陽〉との関係が極めて「対比的」かつ「簡潔」に語られているところである。つまり、「可視界」と「可知界」、「太陽」と「善のイデア」、「見るもの」（肉の眼）と「知るもの」（魂の眼）、そして、「見られるもの」（外界の事物）と「知られるもの」（真実在・イデア）とが、極めて「対比的」かつ「簡潔」に語られているものである。——それに加えて、「可視界」で太陽が〈見るもの〉と〈見られるもの〉に對してもつ関係と、「可知界」で〈善〉が〈知るもの〉と〈知られるもの〉に對してもつ関係とは、「ちよつど同じもの」であると言っている。つまり、ごく簡単に言えば、「前者」を「A」とすれば、「後者」は、「Aダッシュ」という関係になるわけだ。この部分は、ぜひとも別図を参照していただければ、よりはっきりと理解してもらえらると思う。

\*

\*

次に、「……目というものは、君も知っているように、もはやこれを、白昼の光が表面の色どりのつばいに広がっているような事物には向けずに、夜の薄明りに蔽われている事物に向けるときには、ぼんやりとにぶつて、盲目に近いような状態になり、純粹の視力を内にもっていないかのようにみえるものだ。……」、「……けれども、思うに、陽光に明るく照らされている事物であれば、はつきりと見えて、同じその目の内に純粹の視力が宿っていることが明らかになるのだ。……」とある。

さて、この部分は、特に難しいことは何もなく、まさに書かれている通りである。次に、「……それでは、同様にして魂の場合についても、次のことを心に留めてくれたまえ。——魂が、〈真〉と〈有〉が照らしているものへと向けられてそこに落ち着くときには、知が目覚めてそのものを認識し、その魂は知性をもっているとみられる。けれども、暗闇と入り混つたもの、すなわち、生成し消滅するものへと向けられるときは、魂は思わくするばかりで、さまざまの思惑を上を下へと転変させるなかで、ぼんやりとしかわからず、こんどは知性をもっていないのと同じようなことになる。……」とある。

さて、引用文の、「……魂が、〈真〉と〈有〉が照らしているものへと向けられてそこに落ち着くとき……」というのは、すなわち、われわれの「魂の眼」を、いわゆる「実在界」の方へと向けてものを考えるような場合であり、そのような時には、「……知が目覚めてそのものを認識し、その魂は知性をもっているとみられる。……」が、一方、「……生成し消滅するものへと向けられるときは、魂は思わくするばかりで、さまざまの思惑を上を下へと転変させるなかで、ぼんやりとしかわからず、こんどは知性をもっていないのと同じようなことになる」ということである。

#### 八、「純粹思惟」から「精神の飛翔」へと

さて、この「文章」をより正しく理解するためには、『パイドン』という著作のなかに出てくる、次のような「文章」が参考になるかと思う。

それは、次のようなものである。つまり、「……魂が純粹に自分だけで何かを考察するばあいには、魂は、あの、純粹で永遠で不死で不変な存在へとおもむき、そして、そのような存在と同族であるがゆえに、つねにそれとともにあるのではないか、魂が純粹に自分だけとなり、そうなるのが可能であるかぎりはね。そして魂は、もはや、さまようことを

やめ、あの真実在との関係にあつてつねに同一にして不変な状態を保つのではないか。なぜなら魂は、まさにそのような存在に触れているのだから。で、魂のこの体験こそ知恵と呼ばれるものではないか。……」(79c)という下りである。

それでは、「魂が純粹に自分だけとなる」ためには、一体、どうしたらよいかと言えば、それは、次のようになるかと思う。つまり、プラトン風に言えば、われわれ人間の「魂」というのは、「欲望的部分」と「氣概(激情)的部分」それに「理知的部分」とに分かれるわけだが、われわれ人間というのは、様々な「欲望や感情」などに振りまわされている限りは、つまり、「欲望的部分」や「氣概(激情)的部分」などに支配されている限りは、われわれ人間というのは、純粹な「魂」そのものとなることはでき得ない。純粹な「魂」そのものとなるためには、「欲望的部分」や「氣概(激情)的部分」などの支配から離れて、いわゆる「理知的部分」に全面的に支配されることによつてのみ、様々な「欲望や感情」などから解放されて、本来の純粹な「魂」そのものとなることができるとともに、本格的な「思考(思索)活動」(つまり「純粹思惟」)も可能となるものである。

つまり、「魂が純粹に自分だけで何かを考察するばあい」とは、本格的な「思考(思索)活動」にどこまでも深く溶け入つては、いわば「瞑想」(或いは「沈想」)状態に極めて近い状態になるということであり、それは、絶えず変化している「感覺界」(つまり「生成界」)から「魂の眼」を「実在界」の方へと「向け変える」ことと、もう一つは、様々な「欲望や感情」などに振りまわされている、そのような「欲望的部分」や「氣概(激情)的部分」などの支配から離れて、いわゆる「理知的部分」に全面的に支配されては、本格的な「思考(思索)活動」(つまり「純粹思惟」)にどこまでも深く溶け入つて、いかなる時も、まさに「精神の飛翔」というようなものが生じてきて、「……魂は、あの、純粹で永遠で不変な存在へとおもむく」ことが可能になるといふことである。

一方、「……けれども、暗闇と入り混つたもの、すなわち、生成し消滅するものへと向けられるときは、魂は思わくするばかりで、さまざまの思わくを上を下へと転変させるなかで、ぼんやりとしかわからず、こんどは知性をもっていないのと同じようなことになる。……」というものは、すなわち、「魂の眼」を「実在界」の方ではなく、逆に、「生成界」の方へと向けてものを考えるような場合であり、そのような時には、どうしても刻々と変化する様々な「表面的な現象」などにふりまわされてしまい、ただもうああでもないこうでもないと思わくするばかりになつてしまふということである。

\* \*  
それゆえ、大事なことは、目を「生成界」から「実在界」の方へと向け変えることと、もう一つは、様々な「欲望や感情」などに振りまわされている状態から離れて、いわゆる「理知的部分」に全面的に支配されることによつてのみ、まさに純粹な「魂」そのものになることができ、そして、その純粹な「魂」そのものとなつて本格的な「思考(思索)活動」(つまり「純粹思惟」)にどこまでも深く溶け入つて、いかなるような時にこそ、まさに「精神の飛翔」というようなものが生じてきて、「……魂は、あの、純粹で永遠で不変な存在へとおもむく」ことが可能になるといふことである。

## 九、プラトンの「太陽の比喩」の結論



そして、プラトンは、次のような結論を出すことになる。「……それでは、このように、認識される対象には真理性を提供し、認識する主体には認識機能を提供するものこそが、〈善〉の実相（イデア）にほかならないのだと、確信してくれたまえ。それは知識と真理の原因（根拠）なのであって、たしかにそれ自身認識の対象となるものと考えなければならぬが、しかし、認識と真理とはどちらもかくも美しいものではあるけれども、〈善〉はこの両者とは別のものであり、これらよりもさらに美しいものと考えてこそ、君の考えは正しいことになるだろう。……」と。

\*

\*

それでは、ここで、その一つ一つの「言葉」について、簡単に説明を加えてみたいと思う。まず、「認識される対象」という言葉が出てくる。これは、われわれ人間の「魂の眼」によってとらえられるもの、あるいは観て取れるものということであり、ここでは特に「真実在」（つまり「イデア」）ということになるかと思う。次に、「真理性を提供する」という言葉が出てくる。それは、「叡知界」（つまり「イデア界」）に存在する、例えば、「正義そのもの、勇氣そのもの、節制そのもの、美そのもの、その他、そのような様々なイデア」などにそもそも真理性を提供しているものは、まさに「善のイデア」であるとともに、その「善のイデア」というのは、「……知識と真理を提供している」だけではなく、さらに、「……あるということ・その実在性もまた、〈善〉によってこそ、それらのものにならなければならない」ということでもあるわけである。

そして、「認識する主体」というのは、もちろん、われわれ人間の「魂の眼」ということになるわけだ。また、「認識機能を提供する」というのは、いわゆる「認識能力を授ける」ということであり、それは、われわれ人間の「魂の眼」というのは、その「魂の眼」を「実在界」（或いは「叡知界」）の方へと向けてものを考え上昇していくような「精神の飛翔」が生じている時には、そこで一きわ光り輝いている「善のイデア」に明るく照らされることによって、われわれ人間の「魂の眼」というのは、いわゆる「認識能力」を授かり、そこにある、例えば、正義そのもの、勇氣そのもの、節制そのもの、美そのもの、その他、そのような様々なイデアなどを観て取ることができ得るということである。逆に、「魂の眼」を「生成界」の方へと向けてものを考えるような場合には、どうしても刻々と変化している様々な「表面的な現象」などにふりまわされてしまい、ただもうああでもないこうでもない（と思う）するばかりになってしまい、「認識」（つまり「認識機能」）は、何が「真理」（例えば「正義そのもの、その他、そのような様々なイデア」などを観て取ることができないというものが、まさにプラトンの基本的な「考え方」になるかと思う。

\*

\*

それでは、次に引用文の「後半の部分」を考えてみたいと思う。まず、「……それは知識と真理の原因（根拠）なのであって」とあるが、これは、「善のイデア」がいわゆる「知識と真理を提供するもの」であるということであり、それは、まさにその通りということになるかと思う。次に、「確かにそれ自身認識の対象となる」とあるが、それは、〈善のイデア〉というのは、「……知的世界において最後の段階でかろうじて観て取られるもの」であるからである。そして、「あとの残りの部分」（それは「認識と真理とはどちらもかくも美しいものではあるけれども、〈善〉はこの両者とは別のものであり、これらよりもさらに美しいものと考えてこそ、君の考えは正しいことになるだろう」）であるが、それ

は、次のような「意味合い」になるかと思う。つまり、——「善のイデア」というのは、正義そのもの、勇氣そのもの、節制そのもの、美そのもの、その他、そのような様々なイデアをはつきりと見せてくれるもの（或いははつきりと照らし出してくれているもの）であるが、「善のイデア」そのものは、そういう様々な「イデア」（真実在・真理）や「認識」（認識機能）などともまた違って、「善のイデア」そのものというものは、それらを遙かに超越した存在であるということになるわけである。

\*

\*

さて、これまでの様々な説明と別図などから、プラトンの「太陽の比喻」については、可能な限り説明でき得たかと思う。そして、別図も合わせて参照してもらえれば、必要かつ十分な説明になるかと思う。

\*

\*

「参考文献」

- ※底本「世界の名著 プラトンⅠⅡ」（中央公論社）
- ※底本「国家」上下 プラトン著・藤沢令夫訳（「岩波文庫」）
- ※底本「ソクラテースの思い出」佐々木理訳（「岩波文庫」）
- ※底本「パイドロス」プラトン・藤沢令夫著（「岩波文庫」）
- ※底本「ソクラテス」田中美知太郎著（「岩波新書」）